

震災に思ふ

人間の無力

三月十一日の東日本大震災の惨状には、言葉をつた。大自然の猛威の前に、人間の無力をただだ思ひ知らされるのである。「人間の本性は悪、この世は地獄、人生は夢（ゆめ）幻（まぼろし）の如くなり」を改めて痛感するほかはない。人の世諸行無常なのである。

大地震で、そして襲ひかかる大津波で、多大の人命が失はれた。阿鼻叫喚の地獄絵図を前にして、我々には何ら為すすべはなかつた。出来ることは、犠牲者に哀悼の意を表すること、生き残つた人々、恐怖と寒さに震へる人々に励ましの声を送ること、福島原子力発電所の惨事の被害が少なからぬことをしかなない。

人間の宿命は、亡くなつた人々への哀しさに耐へながら、ともかく自分の生を生きるほかはない点である。大は日本人だけで三百十万人の犠牲者を出した大東亜戦争、小は六千余名の死者を出した阪神・淡路大震災はじめ数々の震災、水害、噴火などの自然災害を乗り越えて、我々日本人は励まし合つて、復興を繰り返してきた。この困難にも必ず打ち克つとするのが、日本人の底力なのだ。

天皇陛下の御言葉（三月十六日）

このたびの東北地方太平洋沖地震は、マグニチュード9.0といふ例を見ない規模の巨大地震であり、被災地の悲惨な状況に深く心を痛めてゐます。地震や津波による死者の数は日を追つて増加し、犠牲者が何人になるのかもわかりません。一人でも多くの人の無事が確認されることを願つてゐます。また、現在、原子力発電所の状況が予断を許さぬものであることを深く案じ、関係者の尽力により事態の更なる悪化が回避されることを切に願つてゐます。

現在、国を挙げての救援活動が進められてゐますが、厳しい寒さの中で、多くの人が、食糧、飲料水、燃料などの不足により、極めて苦しい避難生活を余儀なくされてゐます。その速やかな救済のために全力を挙げることにより、被災者の状況が少しでも好転し、人々の復興への希望につながっていくことを心から願はざるにはあらざれません。そして、何にも増して、この大災害を生き抜き、被災者としての自らを励ましつゝ、これからの日々を生きようとしてゐる人々の雄々しさに深く胸を打たれてゐます。

励ましと勇気

私は平成七年に、兵庫県芦屋市で大地震の直撃を受け、運よく命拾ひをした。八万の人口の内、四百人が圧死した。その中には、高等学校の教へ子四人も含まれてゐた。一月十七日の夜以後、寒さと激しい余震の恐怖に襲へながら避難所の住民たちは肩を寄せ合ひながら、日々生き延びた。二月半に渡る避難所暮らしでは、何と言つても自衛隊の給水と、全国各地の友人・知人の、そして無縁だった人々の、物心両面にわたる励ましが生きてゆく勇気を与へてくれた。

三年三月月及及び仮設住宅での生活を経験して、人々の善意、若者を中心として全国から応援に訪れた延べ百三十万人のボランティアの活動により神戸・阪神・淡路が廃虚から蘇生することが出来たことを、心から有難いことだと感謝した。

それにしても、三月十五日現在、すでに三千人以上の犠牲者と一万人を超える行方不明者の数には呆然自失の思ひを禁じえない。福島原発からの避難者も含めて三十万人に及ぶ人々の苦難は、未経験者の想像を絶するであらう。

いま日本国民に出来ることは、被災者への声援、励ましである。現状では、物資を送ることは輸送体制が整つてゐないため、当事者に迷惑や負担をかける。善意が仇になることは経験した者のみの知ることであらう。また、ボランティア、奉仕活動も、組織化がなされる前に現地に乗り込んだりすれば、混乱に拍車をかけることが多く、いはゆる有難迷惑になる。兵庫県南部地震で、避難所を訪れた人の中には、手ぶらで東京からやつてきて、座り込んで炊き出しの食事を食べて帰つて行つた人がゐた。本人は大阪での会合の帰りに寄つた

自衛隊、警察、消防、海上保安庁をはじめとする国や地方自治体の人々、諸外国から救援のために来日した人々、国内のさまざまな救援組織に属する人々が、余震の続く危険な状況の中で、日夜救援活動を進めている努力に感謝し、その労をねぎらひたく思ひます。

今回、世界各国の元首から相次いでお見舞ひの電報が届き、その多くに各国国民の気持ちや被災者と共にあるとの言葉が添へられてゐました。これを被災地の人々にお伝えします。

海外においては、この深い悲しみの中で、日本人が取り乱すことなく助け合ひ、秩序ある対応を示してゐることに触れた議論も多しと聞いてゐます。これからも皆が相携へ、いたはり合つて、この不幸な時期を乗り越えることを衷心より願つてゐます。

被災者のこれから苦難の日々を、私たち皆が、さまざまな形で少しでも多く分かち合つていくことが大切であらうと思ひます。被災した人々が決して希望を捨てることなく、身体を大切に明日からの日々を生き抜いてくれるやう、また、国民一人ひとりが、被災した各地域の上にこれから長く心を寄せ、被災者と共にそれぞれの地域の復興の道

さうだが、この忙しい時に邪魔をしに来たのか、と鬱鬱を買ふはめになつた。善意の押し売りよりも、まごころのある人は、少しでも余裕があれば、義捐金を送ることである。

慰霊と鎮魂

震災で圧死し、火事で焼死し、津波に浸はれ水死した人々には、まづ何よりも慰霊と鎮魂の祈りが最大の供養であらう。すべて無念の思ひと苦しみの中で他界されたのであるから、いはゆる成仏と、魂の安らぎを祈願することである。震災後二日にして、電車の駅前で説教しながら托鉢をする三人の僧侶と出会つた。春日大社では神職たちが、奈良時代から伝はる鎮魂の祈願をした。数多くの宗教組織では、同じ様に「たましづめ」を行なつたであらうが、私も一人一人も物故者の冥福を祈ることを第一義とすべきであらう。

今回、津波にさらはれた人々など行方不明者は優に一万名を超えてゐるし、見つかつた人々の遺体は火葬場がなく、特例として土葬が許可されたといふ。葬儀を行なふことの出来ない遺族も数多い。生き残つた住民も悲痛の思ひなのである。他界した霊魂の御冥福を祈り、今までより清くより強い日本を我々が築きあげることで出来るやう、御加護を祈願したい。

天罰か？

自然現象か？

この大震災を目の前にして、「これは天罰だ！」と述べた人がある。被災の当事者が反省のために述べたのなら話は分らないでもないが、自分は安全な場所にあつて他を批判した言葉なら、不謹慎であり独善的差別思想につながるであらう。神仏を信じない人々なら、単なる自然現象なのに、何を言ふかはごときを、と一笑に付すだらう。無論、人災の面があり、為政者や被災の当事者にぬかりがあつたのであれば、批判することは許されるかも知れない。しかし、今回の津波も原発事故も我々の想定を上回るものがあつた。誰かを批判して済む問題ではなからう。

わが国では古来、飢饉や天変地異に見舞はれた折には、為政者の不徳の致すところだといふ考へ方がなされたりした。その習慣を継承する人々は、天の警告と受けとめ、罰が当たつたのだ、と考へたりする。しかし、それは自己反省のためなら許されようが、他の誰かを非難するためであつてはならない。少なくとも被災の渦中にある現在、口にすべきことではない筈だ。

政府や与野党、野党が、この震災を利用しようとする言動が見られなくはない。政権の延命につながる、と喜んで、政権打倒の好機だと張り切つたりするもの、邪心のなせる業である。「神洲清潔の民」の誇りある日本人は、いま何よりも被災者の救援に全力を傾けるべき時なのだ。

個人の信仰心として、災難や苦難を切り抜ける方策は必ずある筈だ、と考へるのは自由である。しかし、だからと言つて、災害に遭つた人々を愚かだとか、因果応報だと思ふのは、冷酷でしかない。彼らを助けることの出来なかつたわが身の非力と罪深さを悔いるのが、先ではあるまいか？

震災に思ふ(一一)

東北地方の大地震後、二十日以上の日が過ぎた。判明してゐる死者だけでも、二万人を優に越えることとなつた。改めてご冥福をお祈りすると共に、避難所・仮設住宅などで不自由な生活をお過ごしなされてゐる方々に、心よりお見舞ひ申しあげたい。

震度五級の余震は、兵庫県南部地震の経験からして、三ヶ月間は続くと思われるので、現地の方々は本震より弱いのだから、恐怖心に打ち克ちながら、しかも細心の注意を払つていただきたい。

福島県の原因による汚染の危険も、学者たちの声を聞きながら、いたづらにパニック状態に陥らないよう、冷静な行動を取られるやうに願ふ。

震災に関して、新聞・雑誌・週刊誌・テレビ・ラジオ・インターネットなどで無数の報道がなされ、さすがに日本のメディアと感心させられる報道と、被災者への適切な声援・激励がなされてゐるが、「週刊ポスト」四月一日号の「日本を信じよう」と題する「決意の折りの総力編集」の文章は特に心打たれるものがあるので、左に引用したい。

幾度となく焦土から立ち上がった私たちは、再び力強く蘇る。

こんな時だからこそ、自分たちの力を信じよう。
こんな時だからこそ、希望を持って前を向こう。
こんな時だからこそ、他人のために働こう。
未曾有の大災害で貴い命を失つた方々を悼む気持ちには日本中が共有している。今はまだ「折りの時」であるといふのも正論だろう。しかし、これだけの困難であるからならおそろし、一日も早く、力強く立ち上がる勇氣と決意も必要ではないだろうか。

世界が日本を称賛している。烈震に耐えた数多の人と建物。パニックの中でも助け合つて行動し、多くの命が救われた奇跡。堪え難い苦難と悲しみの避難生活でも、秩序と思いやりを失わない強い心。そして、幾度となく焦土の中から蘇り、誇るべき国土と国民を育んできた驚嘆の歴史――。

戦争で焼け野原となつた東京、広島、長崎、沖縄はじめ

被災者を含め、いま日本人に必要なのは、まづ祈りであらう。祈りの効果は絶大である。「折り」より「行動」だと言ふ人もあらうが、折りによつて適切な行動が導かれる。闇雲になんでも動けばよいといふものではない。瞬つた行動は混乱と被害を大きくする恐れもある。各人各人にとつて適切な行動は、人間の浅はかな知恵で導き出されるものではない。天・神・仏・大自然・大生命の叡智にゆだねた行動こそ最善の結果をもたらすのだ。

全国各地の神社では、既に「東北地方太平洋沖地震祈願祭」を行なひ、「祝詞」をあげてゐる。私どもも信仰のある人は自分に合った「折り」を捧げよう。

まづ、他界された人々の御冥福を祈ることである。自然災害で命を落とした人々には大きく分けて二種類あると見られる。人間の業障に禍ひされて自己処罰として無惨にも苦しんで亡くなつた方々と、潜在意識では予知しながら、自らの靈魂の飛躍と残された人たちの救済・援助のために敢へて霊界に旅だつた方々である。

天罰・神罰・仏罰などは、迷信の産物であり、叡智と慈愛に満ちた超越者が人間に罰を与えることはあり得ない。無意識とは言へ、人間の行動や運命は自主独立で決定される。私どもの為すべきは、慰霊と鎮魂と、さらに死者たちへの感謝と、自分たちの強く生きる決意、そして天界・神界・霊界・幽界からの御加護を願ふことである。

ちなみに、天照大神を信仰する私は、右下のやうな祈りを捧げてゐる。早朝の太陽の礼拝時と、夕方の祈願時の言葉である。

多くの街。大震災にすぎたにされた神戸。その光景は、誰もがはじめは「もう二度と、あの街明かりは戻らないだろう」と諦めかけた。しかし、わずか数年後には、それまで以上に美しく力に満ちた街並が復活したのである。今、目の前には危険も、克服できぬはずはない。

以下の特集で紹介するが、地震発生時に客で一杯だったレストランには、震災後、料金を払いに戻ってくる被災者が相次いだ。並べた論じる不敬を承知でいえば、江戸時代、明暦の大火で起きた「切り放ち」の逸話もある。牢役人・石出藩刀は、迫り来る火を前に、囚人たちに「必ず戻れ」と言い渡して牢を解き放つ。数日後、全焼した牢の跡に、一人も欠けずに囚人が戻ってきたという有名な美談である。

日本人には、世界に誇る高いモラルと、勤勉と、忍耐がある。もちろん、技術も経済力もある。失われた命は戻らないけれど、その死にも、国を復興させる意味と力があるに違いない。教訓を活かし、決して諦めずに前に進もう。もつともつと美しい東北の港町と、強い経済と、そして災害に負けない暮らしを作り上げることこそが、真に大災害に打ち勝つことになるのだから。

アマテラスオホミカミ！
あなたの大いなる御恵みに
心より感謝し奉る。
この度の東北大震災により
他界された御霊を守り給へ。
迷ひ苦しんでゐる御霊には
安らぎと鎮めを与へ、祖国
守護の英霊には護国の智慧
と慈愛を与へ給へ。
被災者には、勇氣と生命力
を存分に与へ、全国民が一
丸となつて祖国再生の道を
歩むやうに導き給へ。
幾万の御霊が救済された事
を感謝し奉る。
アリガタウゴザイマス。

特に信仰心を持たない人も、犠牲者の死をムダにせぬやう人間として日本人として、立派な生き方ができるやう、日々修養に努めよう。ことに、明るい、清らかな、素直な人間を目指すことが、日本人の再生には欠かせない。

東北や関東で苦しむ人たちに、自分のできる範囲で援助し、政治家、官僚、自衛隊、警察、消防、海上保安、東京電力、マスコミなどで懸命に働いてゐる人々に感謝の真心を持つて、折にふれて激励してあげよう。また米中はじめ世界の多くの国々からの援助を有難く受け、自分のできる範囲でお返しをしたいものだ。無論、アメリカには日本人虐殺と日本の歴史と伝統を破壊した罪を赦へてあげ、中国には一党独裁で人權を蹂躪してゐる中国共産党を打倒してあげる、といふ「お返し」を、ロシアと韓国には領土返還により友好関係を深めよう、といふ「援助」の手を差し伸べるのである。

このドサクサにまぎれて中国やロシアが武力を発動させはしまいか、との懸念も愛国者には憂慮されるであらうが、今日の戦ひは、理不尽に武力を使へば敗北を意味する。中国は日本国民の人心を掴むことを第一義にしてゐる。得意のパンダ外交は不発に終りさうなので、災害援助に力を入れている。日本政府は、大いに中国の援助を受けるべきである。東北に来てくれた中国人たちは、被災した日本人たちの冷静さ、秩序を守る道徳心、感謝などの礼儀作法、等々に驚嘆し、日本人とはこのやうな立派な民族だったのか、と目が覚めるであらう。自分たちが教へられてきた歴史も眉唾ものだと思はれることもあらう。日本の防衛は人間力にある。自然災害による未曾有の困難に見舞はれてゐる日本だが「禍転じて福となる」機会でもあるのだ。

テレビの報道で、ある被災女性に、
「世界一の災害なら、世界一の頑張りを見せたいです」と書いた紙をカメラに向けてゐた。これを知つた外国人なら、「お見事」といふしかあるまい。
(中島英迪)

震災に思ふ (三)

東北地方の大震災から一ヶ月が経過した。死者・行方不明者併せて三万名に及ぶといふ未曾有の大震災に襲はれて、いま日本は苦悩を重ねてゐる。江戸時代には何れも大きな地震に見舞はれ、多大の人名を失つたし、関東大震災では首都が壊滅し、平成七年の阪神・淡路大震災でも、ライフラインが破壊され、木造家屋での圧死やその後の大火事により幾多の犠牲者を出してきた。

だが今回は東北東海岸の諸地域で津波により村毎・町毎さらはれて、行方不明者一万余人を数へる大惨事となつた。そして、福島原子力発電所の事故は前代未聞であり、政府はスリーマイル・アイランドのレベル5から、一挙にチェルノブイリと同じレベル7だと宣言した。何千人もの犠牲者を出したチェルノブイリと比べて、ひとりの死者も出ない福島を同等に扱ふのは、国際社会からの警戒心を高めて、日本からの輸出を拒み、観光客を激減させる恐れがあつて、この発表は大きく国益を損じるとの批判がなされてゐる。

しかし、政・官・産・学・の総力を挙げて、事故を収束させる見通しも立たない苦悩が、そのやうな判断を導いたのであり、事態の深刻さが表明されてゐる。

事故から一週間後に、何の判断もできない日本政府であつたが、学者の中には冷静に数年かかると述べる人々をとり米人学者は百年間は近くで人が住めないと語つた。しかし、東電社員、東京消防庁職員、自衛隊隊員の必死の努力により、最悪の惨事は避けられ、日本列島に人が住めなといふ事象は回避された。我々は彼らの身を挺しての決死の行動に感謝をしなればならない。

この一大困難にあつて、我々日本国民が改めて確認すべきことが少なくとも二つある。その一は、天皇のご存在の大きさであり、その二は自衛隊の抜群の働きである。

祈りに徹せられる陛下

天皇陛下が日夜、皇祖・天照大神をお祭りし、日本国民の幸福と世界平和への祈りを捧げてをられることは、改めて言ふもないが、今回の惨劇に皇后陛下ともども、どれほど御心を痛めてをられるか、計り知れないものがある。御自分の御代にこのやうな大惨事が起こつたことへの神々に対する申し訳のなきの御心には悲痛なものがあることと拝

察される。まして「国民と共に歩む」ことを即位に際して表明された陛下であるから、被災者の苦しみ・悲しみには甚大なものが御有りだが、皇室は政府や自治体などの動きに迷惑にならない範囲でしか、動くことのできない制約がある。

三月十五日のビデオメッセージ発表に際しても、余震などの臨時ニュースがあれば、途中でカットしても構はない、との御配慮をなされた。そこでは、厳しい寒さの中で避難生活を送つてゐる被災者への優しい励ましの御言葉と、自衛隊・警察・消防・海上保安庁など救援活動に携はる人々へのねぎらいの御言葉、そして世界各国からの見舞いと、被災者の対応への賞賛の論調が紹介されてゐた。

それは被災者だけではなく、すべての日本人に勇気を奮ひ立たせる至上の御言葉となつてゐて、天皇を戴く日本人の有難さをおみしめるのみである。陛下以外の何びともなしえない神業と言へよう。

そして三月十六日、両陛下は、甚大な被害を受けた岩手、宮城、福島、茨城、千葉の各県に対して見舞金を賜ふされ、関東地方の計画停電に合せて、「停電に伴ふさまざまな困難を克服されてゐる地域の人々と共に分かちあひたい」と、自主的に電力の使用を止められた。具体的には、三月十五日から一回約二時間、明かりや暖房など電気の使用を一切控へ、時には蠟燭や懐中電灯を使つてすごされてゐる。陛下は「寒いのは着れば大丈夫」と仰り、食事も質素にされてゐて、皇太子御一家もこれに倣はれてゐる。

三月二十四日、栃木県の那須御用邸で職員が使用してゐる風呂を、避難者に開放せられ、同県の御料牧場で保管してゐる卵約千個や苜蓿、野菜なども避難所に提供された。

余震の続く中、宮内庁から代拝による対応が検討されたが、両陛下は是非御自分で拝礼を行なひたいとの御意向で、宮中三殿の皇霊殿で春季皇霊祭、神殿で春季神慶祭を御親祭され、危機の時こそ、神祭りを何より大切にされる陛下であり、この祈願があるからこそ、国民の魂は安らぎを得ることができ

かうして、三月三十日、東京・足立区の東京武道館で避難生活を送つてゐる人々を見舞はれた。ジャンパー姿の天皇陛下は床にひざまづき、被災者一人一人に「体に気をつけてね」と御声をかけられ、皇后陛下も高齢者の手を握り、顔を近づけて「眠れますか」と話しかけられた。まことに恐れ多いことであるが、「優しい御言葉をかけて頂いて安心しました」と被災者たちは感激の思ひであつた。四月八日には福島・双葉町の集団避難先、埼玉・加須市の高校を行幸啓された。

両陛下は、一日でも早く被災地を見舞ひたいとの御希望だが、警備などで現地に負担をかけられないとの御判断で、行方不明者の捜索が依然続いてゐるため、迷惑のかからない範囲で被災者を励ましたい、と考へてをられる。四月六日、東京・調布市に避難した皇太子殿下御夫妻も、四月六日、東京・調布市に避難した

人々を見舞ふため、「味の素スタジアム」を訪問され、一人一人と膝を突き合はせて「何か不自由なことはありませんか」と声をかけられ、秋篠宮殿下御夫妻も七日、江東区の東京国際展示場にゐる被災者を見舞はれた。

国民をわが子のやうに思はれる御皇室の存在により、日本国民は心からの安らぎを得ることができるのである。

自衛隊員の聖なる戦ひ

十万余人以上の自衛隊員が被災地で命がけの救済活動にあつてきた。航空機約五百機、艦艇約五十隻を駆使して、約二万人の救助をし、五千名の遺体を取容・搬送した。何千トンの物資を輸送し、何十万人に炊き出し・給水を行なひ、何百キロリットルの燃料を供給し、二十二ヶ所で入浴支援をし、一千名以上を診療した。

津波で洗い流され、遺体が散乱し、瓦礫の山と化した凄惨な被災地で、我が身を顧みずに献身的に働く自衛隊員たちの姿は、被災者たちにとつてまさに地獄に仏であり、生きる勇氣の源となつた。訓練されてきたとは言へ、何事も被災者を第一にして、風呂も食事も後回しで我慢してゐる姿は被災者ならずとも手を合はせて拝まざるにあらまい。

対人以外でも、道路の復旧・建設の任務に当たり、東京電力福島第一原子力発電所でも、被曝の恐怖と戦ひながら、十七日からの放水活動の口火を切つたのも自衛隊であつた。大規模支援を買つて出た米軍を鼓舞したのも、疲労を物ともせず黙々と働く自衛隊員の姿であり、米軍が放射能被害管理などを専門とする部隊約四百五十人の派遣準備に入つたのも、自衛隊の命をかけて任務を遂行する「本気度」を確信したからだ、と言はれてゐる。

自宅が全壊したり、家族が行方不明といふ隊員も被災者支援を続けてきた。持つてゐた自分の携帯糧食を被災者に渡し、空腹状態で作業をしたり、二週間以上着替へがでず風呂にも入れなかつた隊員もあり、入浴可能後も自分たちは最後に入つた。

彼らにとつて天皇陛下のメッセージは何よりの励ましであつた。「ありがたく敬慕に至ります」「活動に従事する隊員には何よりの励みです」といつた声が聴こえた。その後、陛下から「足りない物はないか」「困つてゐることはないか」との書面の御下問があり、いくつもの項目に記入したベテランの担当自衛官は、「書く手がプルプルと震へ、我知らず涙が出ました」と語る。

防衛予算を異常なまでに削減され、自衛官の人数も現政府に削減され、本来の防衛任務とは異なるこの救援活動に派遣されても、歯を食いしばつて努力する聖なる隊員たちの姿はまことに日本人の誇りであり、かれらの尊い復興への志を受けて、日本国民はそれぞれの場合で底力を発揮すべきときである。

(中島基大 述)

震災に思ふ（四）

海外からの激励と賞讃

三、一の大震災に対して、海外から多くの支援がなされ、激励と賞讃の音が寄せられた。まことに有難い限りであり、日本国民はその恩を忘れず、これまで通り諸国が困った折には喜んで援助をしなければならぬ、と思つた。既に多くのメディアで発表されてきたが、それらの中から主なものを選び返つてみたい。

オバマ米大統領（三月十七日記者会見）「原発周辺の住民に著しい危険をもたらしてゐる。日本を支援すべき重大な緊急事態だ」（福島第一原発事故の影響について）

「今回の大きな試験で、日本国民は独りぼつちではない。たとつともない悲劇に見舞はれたが、私の心は日本の方々とともにある。米国は常に、助けを必要とする最も偉大な同盟国とともにある」

「日本人の強靱さと英知を思へば、必ずや今まで以上に力強く復活するだらう」

「米国民がいかに悲しみに満ちてゐるかを伝えることが、この場にある一番の目的だ」

「日本人は国家に献身的だから、必ずや復活する」

ブゼック欧州議会議長（十六日、EU議会で）「通常の生活を取り戻すため、尊厳と冷静さを維持し、復旧作業に取り組んでゐる人や一般市民に敬意を払ひたい」

米紙ニューヨークタイムズ（十六日付）

福島第一原発に残り、被曝の危険にさらされながら決死の努力を続けてゐる作業員約五十人の取り組みを詳細に伝へ、「日本を核の大惨事から守るための最後の砦だ」として「犠牲的行為」に賛辞を贈つた。

米紙ウォール・ストリート・ジャーナル（十四日付）

「三百年に一度の大震災による大混乱のさなか、日本人は平静を保ち、大規模な救助・復旧活動を展開し、世界の尊敬を集めてゐる」

米紙ワシントン・ポスト（十六日付）

「もし有能で、技術分野で明晰な日本人が完全に安全な原子炉を作れないのだとしたら、一体だれが作れるのだ。もし、本格的な核惨事が日本で起きれば、世界がその代償を支払ふことになる」

中国紙北京青年報（十七日付）

新潟県の避難所で生活する中国人被災者のルポ記事を掲載。仙台で商店を経営する中国人男性は、「避難の初日に汚れてゐたトイレは日本人の皆さんが掃除して翌日はきれいになつてゐた。スタッフが夜間は当番に当たり、安全を確保してくれてゐる」と話し、助け合つて困難に立ち向かう日本人の精神を称賛した。

朝鮮日報
被災地で食料や燃料が不足しても、先を争ふことなく行列を作つて並ぶ住民の姿を取り上げ、「日本人が示した（他人への）配慮と市民意識に、世界が感嘆してゐる」と称賛し、かうした姿について大統領が談話。李明博韓国大統領「日本の品格を高めてゐる。韓国も見習はなければならない」

米紙ロサンゼルス・タイムズ（十三日付）
「非のうちの所のないマナーは、まつたく損なはれてゐない」との見出し。最悪の状況下でも秩序を保ち、思ひやりを忘れない日本人の振る舞ひを伝へた。足を怪我して救急搬送された高齢の女性が、痛みがあるにもかかわらず、迷惑をかけたことをわび、他の被災者を案じる様子などを紹介した。また、ダイヤが乱れ、大混乱する地下鉄に整然と乗り込む日本人男性の「人を押しのけるのは下品だし、そんなことをしても何にもなりません」といふ声を紹介。「他者を気遣ふ日本人の特質は最悪の状況でも失はれてゐない」「かうした礼儀正しさが国をひとつにまとめ上げてゐるのだらう」と書いた。

住吉大神、宇宙浄化の祈り

スミノエノオホミカミ！
大神の宇宙浄化の御力で！
福島原発の汚染を浄め給へ。
放射能、放射線が人体を始め
大自然に害をなさぬやうに
清め給へ、祓ひ給へ。
原発汚染が既に浄められ、
天照大神が輝き給ひ、
人々が安心して暮らせませう
こと感謝し奉る。せまう
アリガタウゴザイマス！

米紙ウォール・ストリート・ジャーナル（十三日付）

「不屈の日本」と題する社説を掲載。地震大国日本の技術力と「備へ」を称へ、「日本は経済が低迷し、政治家の失態に国民の大部分は当惑してゐるが、間違ふべきではない。日本の産業力は依然として偉大だ」

「日本は大自然からの大攻撃に耐へ、生き残るための用意をしてきた国はない。日本の国民が最大級の地震に立ち向かう、立派に耐へてゐることは素晴らしい」と書いた。

中国紙新京報

「日本大地震はわれわれに何を告げたか」の題。「教師は最後に電気を消してから教室を離れ、避難民は暗闇の中で秩序正しく並び救済物資を受け取る」

中国紙北京青年報

「長期にわたる国民教育の成果と、技術面で地震予防対策の進歩」が日本の優れた防災対策の背景にある、との識者の見解を紹介。

韓国紙中央日報（十四日付）

「日本はある『一惨事でも配慮忘れぬ文化に世界が驚いた』の題の現地ルポ。地震で停電した秋田市内のホテルでは、電気が来るまで宿泊客を受け入れられない」と案内すると、すぐにロビーに集まつてゐた宿泊客五十人余りが静かに列を作り始めた。誰も何も言はないのに老弱者らを前に入れた。暗黒の中に一筋の列ができた。順番を争ふ姿はなかった。非常食としてうどん十杯が用意されたが、約五十人の宿泊客からは先を争ふことなく、互ひを気遣つた、と紹介。うどんに向かつて駆け寄るどころか、誰もが他の客の空腹を心配して後ろに後ろにうどんを回す。譲歩のリレーが続いた。この冷静な行動は、他人への迷惑を避けようとする独自の文化によるもの、と分析。被災地での略奪は一件も伝へられてゐないことに加へ、津波に人が巻き込まれる場面を放映しないなど、報道機関も被災者に配慮してゐる、と伝へた。

米CNNテレビ（十二日）

「なぜ日本では略奪が起きないのか」のテーマで議論。「災害に付き物の略奪と無法状態が日本で見られないのはなぜか」と意見を募集。

「敬意と品格に基づく文化だから」、「愛国的な誇り」、「自立のチャンスと最大限に活用する人々で、進んで助けたくなる」といった声が寄せられた。

キャスターの「現地住民はどうふるまつてゐるか」の問に仙台地区の女性記者は、「住民たちは冷静で自助努力と他者との調和を保ちながら、礼儀を守つてゐる。ともに助けあふ共同意識のせいか、だれもが秩序正しく行動してゐる」と答へた。「略奪のやうな行為は皆無なのが感動的だ。みんなが正直さと誠実さに駆られて機能してゐるやうだ」とも。